

A Graduates' Association News of
TOHOKU
INSTITUTE
OF
TECHNOLOGY

Koudai

Jin

- 1 ●ごあいさつ
副学長 沢田 康次先生
学生部長 吉田 旺弘先生
入試部長 小出 英夫先生
- 7 ●特集／恩師からの便り
情報通信工学科 菊地 重昭先生
建築学科 田代 侃先生
- 9 ●設立 20 周年記念事業の総括報告
同窓会会長 秋元 俊通
- 9 ●活躍する工大人
未来につなげる新しい技術 島田 信一氏
学生から教員へ 佐藤 篤氏
経済交流会 10 周年について 森 育夫氏
駅づくり、街づくりへ 渡邊 英明氏
国際学会に初参加 加藤 嘉憲氏
人生一度は万博だ！ 祖父江 治朗氏
考える工大人 鎌田 直樹氏
- 15 ●工大人同窓会・座談会
仙建工業株式会社
- 20 ●インターンシップ体験記
- 26 ●支部活動報告
北海道支部
青森支部
新潟支部
- 28 ●本学後援会との連携強化
後援会副会長 長島 久雄氏
- 30 ●教育振興資金事業計画の寄付募集について
財務課長 古山 芳雄氏
- 31 ◎同窓会からのお知らせ

新任の挨拶と 大学の近況報告



副学長
沢田 康次 (さわだ やすじ) 先生
2001年4月 東北工業大学通信工学科教授
2002年4月 同 情報処理研究所長
2002年4月 同 広報委員会幹事
2004年4月 同 副学長

本年4月から将来計画・広報担当の副学長を拝命しました。本学同窓会と後援会の皆様よろしくお祈りします。

「将来計画」と言いましても、現在の私学を取り巻く状況は今年、来年を勝ち抜かずして将来はありません。東北地方の工学系大学、総合大学の工学部への入学志願者は、国立・私立を問わず、少子化と理科離れの影響で毎年平均的に約10%減という厳しい状況です。前から言われていたことですが、全入時代が目前に迫っています。全入ということは買い手市場ですから定員割れが頻繁に起きることを意味しています。

この状況をわれわれ工大人はどのように乗り切ればよいのでしょうか？ぜひとも皆様のお知恵とご協力が必要です。

本学は昨年、地域社会にとって必要とされる大学、存在感のある大学を目指すことを明記した本学の理念・教育目標を制定しましたことをご存知のことと思います。その線に沿いまして、従来からの情報処理技術研究センターを改組し、昨年4

月から「新技術創造研究センター」と「eラーニングセンター」を発足させました。前者は『地域連携プロジェクト研究』や『tohtechサロン』など東北地域において他の大学に見られないほど強力に地域産学連携を推進していると自負しています。これはまだ一例に過ぎませんが、他の大学も同じ状況で奮闘している中で、明確で判りやすい目標を発信し大学にない本学の魅力を高める必要があることはいうまでもありません。

もうひとつは、これは高校・大学だけの問題ではないということです。少子化・理工系離れがこの勢いで続くとなると、東北地方の企業に就職する人材が十分供給されないときが数年後にやってきます。地域産学連携の最重要課題はシーズ・ニーズの関係といわれていますが、さらに大事なのが人材の供給です。これは今まで存在しなかった新しい問題なのです。仮に少子化は当面仕方ないとしても、理科離れはわれわれの手で何とかしなければ、地域の将来の発展は望めません。



本学を卒業されて地域で活躍されている同窓会・後援会の皆様、われわれが直面しているこの共通問題について機会あるごとに話し合っていければと考えます。当面、本学としては現在の6学科1学部の体制がこのような社会状況にあっているか否か、本学の魅力をさらに高める方法は何か、について検討することが火急であると認識し現在結論を急いでいるところです。

又、ハード面の魅力ある学内環境整備を実現化するため、施設整備委員会が中心となって次項目の整備も進めています。

①新1号館(学生へのワンス

トップサービスの一元化エリアの整備)建設

②それに伴う外構やバス停、学生駐輪場などの周辺環境の整備を逐次実施

③既存建物の新耐震基準を満たすリニューアル化

④学生食堂の改善及び二つのキャンパスを繋ぐシャトルバスの増便の早期化

⑤学生マナーアップも視野に入れたISO取得

本学は、上記のように地域の発展に欠かせない大学を目指す努力を続けたいと考えていますので、同窓会ならびに後援会の更なるご協力よろしくお祈りします。



写真・上/完成間近の新1号館外観(バス道路側から)
写真・下/新1号館内観(3階ロビーから1階を臨む)

ごあいさつ

学生の 目線に立つ教育を



学生部長
吉田 旺弘 (よしだ あきひろ) 先生
1967年 東北工業大学工業意匠学科 助手
1971年 同 講師
1976年 同 助教授
2003年 同 (現デザイン工学科) 教授
2006年 同 学生部長

今年4月から学生部長を担当しています。どうぞよろしくお願いいたします。

本学ではいま『学生の目線に立ったきめ細かい教育』を推進しています。そうした中、この4月から『ウエルネスセンター』を立ち上げました。「ウエルネス」は疾病の有無に関わらず、生き甲斐を持ち、より良い人生を送るために自分自身を高めようとするポジティブな考え方・生き方を含めた広義の「健康」を指します。

最近、種々の事情で心の悩みを抱えて保健室やカウンセリングルームを訪れる学生が年々増えています。これらの学生の悩みを聞き、適切に指導して問題を解いていくためには、新たな体制と全学あげでの取組が必要でした。昨年度から常勤のカウンセラーを迎えることができ、これまで以上にきめ細かい対応ができるようになりました。

『東北工業大学ウエルネスセンター』には保健室とライフデザインカウンセリングルームがあります。前者には看護師と非常勤の医師、後者にはカウンセラー（常勤と非

常勤各1名）と各専門学科および二ツ沢キャンパスのふたつのセンターの教員から選ばれた支援相談員、そして非常勤の精神科医が配置されています。これによって本学の学生および教職員の疾病予防ならびに身体的・精神のおよび社会的に捉えた健康（ウエルネス）の保持増進を図れるようになることが期待されています。

本学に入学した学生諸君が健康を保ちつつ安心して学べ、良い師や友人・先輩・後輩に出会い、多くの良い思い出を作って本学を巣立って行ってほしいと考えています。そのために我々は努力しますが、同窓生の皆様にもぜひお力添えをいただきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。



06年6月23日、AED（自動体外式除細動器）実技講習会
真剣な眼差しで臨む本学教職員

ごあいさつ

「工大人」の 強いパワーを工大に!!



入試部長
小出 英夫 (こいで ひでお) 先生
1962年 静岡市出身
1990年 東北大学大学院工学研究科土木工学専攻修了（工学博士）
1990年 東北工業大学工学部土木工学科講師
1992年 同 土木工学科助教授
2005年 同 建設システム工学科教授
2006年 同 入試部長

同窓生の皆様、ご協力ありがとうございました。皆様のご活躍を本学PRとして4月以降積極的に活用させていただいております関係上、はじめに御礼申し上げます。

他大学との差異を知りたい高校生・その保護者・高校教員等から「工大の売は？」と問われ、「東北地方の技術者集団において最強のネットワークを誇っている」と非常に効果的な返答ができます。本学教員の活躍ももちろんですが、同窓生のご活躍は特に就職と密接に関連してイメージされるため効果絶大です。

ところで、今手元に2年前の工大人があります。その冒頭で当時の田中正之副学長が、「幸い本学は、2倍を超える入試倍率で、まだゆとりのある定員確保ができておりますが、・・・」と書かれています。たった2年後の今回、1年生は765名在籍（4月時）してはいるものの、残念ながらゆとりのある状況とは言えなくなったことをお伝えしなければなりません。少子化と、近隣の某国立大工学部の3月30日二次募集合

格発表に象徴される工学部離れ（不人気）による影響であり、高校生の価値観で見た本学の競争力を一層高める必要性を感じております。このような理由もあり、「就職の強さ」と共にその根拠でもある本学同窓生のご活躍を積極的にPRしているところです。

最後に、D科の入試に関し大きな変更点がありますのでお伝えします。大学入試センター試験利用入試における数学が必修ではなくなります。また、一般入試においては、「数学」と同時刻に「国語」も設定され、どちらかを選択できるようになります。これにより、例えばA日程では国語・英語・実技の3科目でのD科受験も可能となり、デザインに興味がある文系高校生が本学D科を志願しやすい状況になりました。

皆様方にとって頼もしい後輩達が今後も卒業していく東北工大であり続けるよう、全力で入試部長の職に当たりますので、「工大人パワー」のご支援もよろしくお願ひ申し上げます。

神を代行する者



情報通信工学科
菊地 重昭 (きくちしげあき) 先生
 1937年 仙台市出身
 1962年 東北大学工学部卒業
 1968年 東北工業大学講師
 2004年 同 教授 定年退職

東北工大を定年退職して一年余。現在、非常勤講師として、若干のお手伝いをさせていただいている。ここでは、工大在職四十年弱の思い出の中から一つをご披露し、この欄を埋める責めを果たしたい。

漫画「鉄腕アトム」や「ドラえもん」の世界のように、子供たちに向けた夢には、科学技術の発展に伴い、既に実現したものもある。作者たちの先見的な目は、子供向けの漫画などとあなだれないものがある。このような子供の夢を叶える科学技術の発展がある一方、自己破滅を来すほどの破壊力を持つ危険な兵器を生み出したり、大量消費による資源の枯渇を促す結果を招いたりするような、また、大量の汚染物質を排出し環境破壊をもたらす科学技術の発展もある。

そんな現実と直面し、私は、二代目学長、故内田英成先生の卒業式での祝辞を思い出す。今から三十数年前のこと、蜚雪の功成り、技術者としての門出を迎えた、卒業生に贈った言葉、「技術者とは、

神を代行する者。諸君の多くは、その技術者になる。心せよ！」である。

学長は、「神を代行する」の意味を説明していない。私にとって、それは一つの謎解きになった。万能の神には、物を創るのに不可能はなく、如何なるものも創造できる。神に代って如何なる物も創れるような技術者を目指せ、というのでは、人間のごう慢を助長するものでしかない。

当時の日本は、高度成長の時代にあり、国民はみな、より良い暮らしを目指してまっしぐらだった。テレビ、冷蔵庫、車など、工業製品の製造分野が好調で、技術者たちはもてはやされた。テクノロジー・アセスメントの考えは、まだほとんどなかった。こんな時に、先を見通し、世に害を及ぼすような物の開発は、断じて行わない、という抑制の意志を併せ持つ創造こそを、神に代ってなす技術者たるべく研鑽せよ、と学長は若者たちを激励したのだと私は思っている。



母校は母港

元 建築学科
田代 侃 (たしろ かん) 先生
 1938年 岡山県出身
 1966年 東北大学工学部 卒業
 1967年 東北工業大学助手 就任
 2006年 同 教授 定年退職

東北工業大学に39年間在職して、今年の3月に定年退職しました。東北工業大学OBが工大人ならば、私も工大人の仲間入りをしたことになります。大学は卒業したら縁が切れるものではなく、東北工業大学は工大人の生涯の母校です。一人一人の人生航路において情報を得たり、エネルギー補給、補修、安らぎのための母港のようなものでしょう。工大人はいつでも母港を利用でき、また工大人の活躍が母校に活力をもたらすこととなります。

大学を取り巻く状況は少子化、学力低下、理系離れなど大きく変化しています。最近の本学学生の活力が低下していること、将来の仕事への考え方（職業観）が未熟になっていることも心配です。豊かさとその歪み、社会構造の変化、科学技術の進歩にともなう学生にとっても大学にとっても変革が求められる難しい時代です。

大学を維持発展させる最も大きな力は卒業生の活躍

ですから、工大人の実社会での貢献や母校の教職員としての業績が母校を支えることとなります。また、評議員や理事として母校の運営に有意義な参加をしてもらいたいし、多くの工大人の力を結集して母校を支えるために寄付行為にも期待するところです。

私の近況は建築学科の教育からは引退して、現在は本学の新技術創造研究センターに客員研究員として身を置いています。やり残した研究開発の始末をしながら、工大人と共同して自然エネルギー利用の技術開発を行うことなどの夢を描いています。この新技術創造研究センター（8号館）は昨年できた新しい組織で本学の地域・産学連携の窓口にもなっています。ここには工大人の優秀なコーディネーターが配置されていますので、全工大人の母港としていつでも気軽に技術相談などに訪れてください。

同窓会設立20周年 記念事業を終えて



同窓会会長
秋元 俊通 (あきもと としみち)
1949年 仙台市出身
1975年 土木工学科卒
(5回生・都市計画研究室)
現在 株式会社秋元技術コンサルタンツ
代表取締役

本会の悲願とした全学同窓会の設立から早いもので20年が経ち、節目とする各種の記念事業を会員の方々ならびに大学当局をはじめとする多くの皆様のご協力を得て実現することができたことに心よりの御礼を申し上げます。

本記念事業の趣旨は、「会員間相互のネットワークを高める」、「本学ならびに本学後援会との更なる強い連携と在学学生へのきめ細やかな継続支援」、「本会の存在を示す新たなメッセージの発信」であり、今後もこのスタンスを継続してまいりたいと考えております。

記念事業の第一に記録しておくべきことは、国際的に活躍の本学学長・理事長の岩崎俊一先生と同じく国際的憲法学者の樋口陽一先生による「科学技術と文化」をテーマとする理系と文系の異質と思われる両巨頭の対談が実現できたことです。新しい物事を組み立てるためには常に歴史から学びつつも、実践を通して先見性を如何に高めることが必要かを学び取ることができたこと、質の高いメッ

セージをメディアを通して社会に示せたことも誇りに思うところであります。

更に、次世代に繋げることを主目的とした「記念冊子」も無事完成にこぎつけることができました。これらことは、本企画に賛同いただいた多く皆様のご協力あって成し得たことであり、改めて感謝申し上げる次第です。

現在、本学はソフト・ハード両面に亘り質の高い姿を求め、会員皆様方にとっても「誇れる東北工業大学」になろうと、大きく羽ばたこうとしております。また、この4月より、大学および後援会のご協力を得て、同窓会事務局に専従者を配置することもできました。これらによって、会員の皆様方とのネットワークを今まで以上に高める所存でおりますので、今後とものご理解とご支援をお願い申し上げます。

設立20周年記念対談



年

活躍する工大人 未来につなげる 新しい技術



危機管理産業展 2005 に出展

工大を卒業して早35年になります。卒業して3年後に会社を立ち上げてから、まさに駆け足で過ごしてまいりましたが、お客様やメーカー様、社員など周りの方々の御協力、ご指導を得て、何とか32年間やってることが出来ました。

システムズは、映像・音響・通信等各種システムの、提案・設計・施工・保守を主に行っており、特に防犯監視、映像制作、教育支援の分野の仕事も多く手がけています。

当社では、初の全国規模の展示会への参加ということで、昨年10月に東京ビッグサイトで行われた「危機管理産業展 2005」に出展いたしました。出展企業は200社を越え、3日間で延べ3万人以上が訪れるという大イベントの中で、当社も映像監視における自社オリジナルソリューションを、全国に向けて紹介することができました。

また、システムズとして力を入れて推進しているシステムが、「緊急地震速報装置」です。ご存知のとおり日本は地震大国。この装置は、本格



株式会社 システムズ 代表取締役
島田 信一 (しまだ しんいち) 氏
1948年 仙台市出身
1971年 電子工学科卒業 (4回生・大野研究室)
東北電気工事 (株) (現ユアテック) を経て
1974年 (株) システム産業設立
1994年 (株) システムズに社名変更

的な地震の揺れがくる前に、何秒後にどれぐらいの震度の地震がくるかという情報を、学校や事務所、一般家庭に伝送するというものです。このシステムが普及すれば、近い将来発生が予想される宮城県沖地震においても、被害を相当程度防ぐことが出来ると期待して、当社も共同開発に参画しているところです。

新しい技術は、未来の私達に、幸せと快適さをもたらすものと信じています。その中で当社も、ブロードバンド環境・デジタル化の推進等による技術革新の波に乗り遅れぬよう、常に最新の情報をキャッチし、技術レベルの向上に注力していきたいと考えております。

それでは、工大の益々のご発展と、同窓生の皆様のご活躍を心からお祈り申し上げます。



緊急地震速報装置「デジタルなまず」

学生から教員へ



私が工大に入学したのは、ちょうど平成元年のことで、す。当時は、二ツ沢キャンパスもなく、大学院もなく、中庭や校舎の様子も今とは大きく違いました。しかし、当時と今とで何が一番変わったかと聞かれれば、それは私自身の立場です。私は、現在、環境情報工学科の講師として、今度は学生ではなく教員として工大に籍を置いています。(写真:佐藤研究室)

私は、学部から大学院まで一貫して工大で学んできました。つまり、工大で受けられる全ての教育を受けた学生はこうなるという一例が私ということになります。ただし、全く社会に出ていないわけではありません。メーカーや研究所に勤務したこともあります。工大で取得した学位を背負って世の中に出た感想はどうかというと、決して悪くはありません。努力さえすれば、工大生は技術者としても研究者としても十分に活躍できるということを知らされました。

工大の歴史上、後にも先にも私だけということが一つだけあります。それは、私



東北工業大学 環境情報工学科講師
佐藤 篤 (さとうあつし) 氏
1970年 北海道苫小牧市出身
1993年 東北工業大学通信工学科 卒業
1995年 同 大学院修士課程 修了
1995年 日本電気(株)入社(1996年 退職)
1999年 東北工業大学大学院博士後期課程 修了
1999年 動画制作センター(2001年 退職)
2001年 東北工業大学環境情報工学科 助手

が工大の第1号博士であるということです。そのことを考えるたびに、いつも頭をよぎるのが、「自分ができたこと」＝「工大のドクターができること」になるということです。誰に頼まれたわけでもありませんが、そんな使命感や責任感を勝手に持って、今は教育・研究に取り組んでいます。

学生時代、全く教員になる予定のなかった私にとって、教育という仕事は、毎日が苦勞の連続です。しかし、私には、どんな経験豊富な先生も持ち合わせていない、学部と大学院を工大で過ごしたという経験があります。これからの長い教員生活では、工大生がどこまでできるのかがよくわかる立場の人間として、学生の力を100%引き出してあげられるような指導を心掛けていきたいと考えています。

最後になりますが、同窓会の皆様には、ぜひ我々が育てた学生達を、今度は社会の先輩として見守っていただければ幸いです。

東北工業大学
経済交流会
10周年について

クリスマスパーティ風景



森勇建設株式会社 代表取締役
森 育夫 (もりいুক) 氏
1947年 青森県生まれ
1971年 建築学科卒(2回生・斉藤研究室)
東北工業大学経済交流会 幹事

東北工業大学経済交流会が平成9年5月に発足してから、今年で10周年を迎えました。会員数も60人と年を重ねるごとに多くなってきてきております。

併せて、東北工業大学経済交流会の千田隆志会長が、今年から本学の評議員に任命された事は、大変喜ばしい事です。従って、経済交流会としてもこれまで以上に工大に対するミッションを高めることが不可欠なことと言えます。

最近、特に同窓会との交流を深め、お互いに工大が発展する様、全面的協力を約束しています。

経済交流会の定期的行事としては、本学の質の高い教授陣をお招きしての学習会等を行ってきておりますが、今年の12月には、毎年恒例となっ

ているクリスマス会と合わせて、10周年特別事業を盛大に執り行なう予定でおります。現在、10周年記念事業の実現に向けて、大学当局・同窓会・後援会・高校同窓会及び後援会等のご協力を得られますよう、役員一同、協力して計画を進めています。

今後、工大の同窓生が一人でも多く経済交流会(ちょっとだけハードルがあるのですが)に入会していただけるよう、努力していきたいと思っております。

最後になりますが、昭和56年12月に現会社を設立して25年経過しました。工大卒業生が3名在籍し、今後も3名のOB社員と共に工大人として少しでも世の中の為に貢献していきたいと思っております。



駅づくり 街づくりへ…

さまざまな邂逅を経て



東日本旅客鉄道(株) 仙台支社 企画部長
渡邊 英明 (わたなべ ひであき) 氏
1953年 宮城県亘理町出身
1976年 建築学科卒 (7回生・材野研究室)
日本国有鉄道入社
1987年 東日本旅客鉄道(株) 東北地域本社
2004年 現職

私は1976年に国鉄に入社し、半年の研修期間を経て、仙台新幹線工事に配属となり、その直後から仙台駅の設計に携わりました。勿論駅舎の実施設計などは初めてのことであり、その後も含めて多くの先輩の皆様をサポートしていただき、駅舎や駅ビルなどのデザインを中心とした業務に携わって参りました。

時は経て、1987年には国鉄改革により新会社が発足し、私はJR東日本の採用になりました。現在、JR東日本仙台支社にて企画部門を担当しておりますが、これまでの勤務地は主に仙台と東京の往来で、はや20年が経過しようとしております。

この間、駅づくりや駅前広場を中心とした駅周辺整備計画、リゾート関連計画や商業施設計画、そして鉄道高架化などの都市計画事業と相俟った、いわゆる街づくりに関連する多くの業務に携わって参りました。これらの業務を進める過程においては、様々なフィール

ドで本学の先生そして先輩の皆様などにご支援をいただいていることは言うまでもありません。

現在、仙台支社にて企画部門を担当していることから、支社での経営計画や設備投資計画のほか、社外フィールドでの関わりも多く、地域の皆様との連携により地域の活性化などについても多く関わる業務に携わっております。そして、このような業務や様々な方との邂逅を経て今日に至っておりますが、このプロセスにおいて構築されたヒューマンネットワークは私の至上の財産と自負しております。

今後も多くの本学同窓の皆様と連携を密にしながら、相互に更なるネットワークが進展し、併せて本学の益々の発展に少しでも貢献できますよう努力して参りたいと思います。

国際学会に初参加



(財)日本気象協会東北本部
加藤 嘉憲 (かとう よしのり) 氏
1954年 宮城県大河原町出身
1977年 土木工学科卒業 (7回生 盛合研究室)
(財)日本気象協会東北本部入社

(財)日本気象協会に入社して29年になりました。大気環境影響調査のための気象調査に10年、ラジオやテレビ気象番組出演に5年携わり、現在はダム管理向け降雨予測と除雪作業向け雪氷予測のシステム開発をしています。

わが国では、1990年のいわゆる『スパイクタイヤ規制』以降、積雪寒冷地における冬期道路管理は、きめ細かな路面管理が重要な課題となっていました。適切で効率的な散布作業を実施するため、路面温度の変化を事前に予測できるシステム開発が求められました。そこで「凍結抑制剤散布における路面温度予測システム」を開発し、2005年に特許を申請しました。

路面凍結を予測するには、路面温度の変化を的確に予測するメカニズムがキーポイントになります。地球が太陽から受ける熱量と宇宙空間に出て行く熱量を物理的に計算する方式、ならびに交通量と車両から排出される熱量を予測式に含めた点が新技術となって特許申請の対象となったわ

けです。路面温度予測システムは従来の手法に比べて路面温度の予測精度が約20～30%高くなりました。この路面温度予測システムの結果は仙台市や国交省を通して除雪業者に渡り、除雪作業効率化の一役を担っています。

路面温度予測システムと除雪作業現場における利用実態を今年(2006年)3月にイタリア・トリノで開催された「国際道路気象学会(PIARC)」で発表しました。国際学会での英語による発表は困難と緊張の連続でしたが、終了後の充実感は貴重な経験となりました。

今後も気象予測精度を高めるシステム開発とともに質の高い気象予測情報を提供していきたいと思っております。

最後になりましたが、工大の皆様方と卒業生の皆様のみますのご活躍とご発展を心よりお祈りいたします。



人生一度は万博だ!



工大に入学をする前年の1970年3月、日本初の国際博覧会(大阪万博)が開催され、私は、事前知識もなく数多くのパビリオンを見て回った記憶が残っています。しかし、この約6,400万人を動員した過去最大の国際博が、その後の日本経済に大きな影響を及ぼし、自身の進路にも大きな影響を及ぼしたことは言うまでもありません。

それから、35年後の2005年3月、ここ愛知県で2005年日本国際博覧会(通称:愛・地球博、以下愛知万博)が開催されました。

私は、営業からプロモーション室に異動になった2001年から閉幕の2005年9月までの約4年間、この愛知万博の様々な業務に係わらせて頂きました。当然、35年前に自分がこのような立場で、万博に関係するとは、想像もしませんでした。・・

大阪万博のテーマは「人類の進歩と調和」、愛知万博のテーマは、「自然の叡智」「地球大交流」、まさに人類は進歩を遂げたあまり、調和を忘れ、地球そのもの、人そのもの



株式会社 電通 中部支社 プロモーション室長
祖父江 治朗 (そぶえ はるあき) 氏
1952年 愛知県名古屋市出身
1975年 工業意匠学科卒(5回生・角田研究室)
1975年 商工美術(株) 入社
1980年 (株)むつわ企画入社
1982年 フリー
1985年 (株)電通中部支社入社
2001年 現職

のを考える時代の万博だった訳です。当然、電通の業務も35年前とは、大きく異なりました。作るだけ、魅せるだけで評価を得られた時代から、企画から施行、運営に至るまで、「地球への環境」「人への環境」を細心に配慮した業務推進が求められ、あらゆる面で環境万博の思想が浸透していました。

そう言った意味では、ディスプレイ業界においても愛知万博は、大きく変革を迫られた万博ではなかったかと思えます。

愛知万博の入場者数は、約2,200万人。大阪万博の入場数には、はるかに及びませんでしたが、今、地球環境を考え、人の暮らし、人との交わりを考える万博として、大成功であったと思います。

そんな愛知万博に直接的に係わりがもて、様々な経験ができたことは幸せの一語ですが、工大で学ばせてもらったからこそ、実現できたことと自負しております。やはり、「人生一度は万博だ。」です。

考える工大人



特定非営利活動法人 水環境ネット東北
鎌田 直樹 (かまた なおき) 氏
1981年 宮城県岩沼市出身
2005年 環境情報工学科卒(1回生・近藤研究室)
現在 特定非営利活動法人 水環境ネット東北

環境情報工学科が初めて卒業生を送り出したのが2005年3月。私はその卒業生の一人として、本学を卒業しました。卒業後は、NPO法人水環境ネット東北で働いております。

NPO。最近よく耳にする言葉ですが、NPOとはなんのでしょうか。NPO = Non-Profit Organization。つまり「非営利組織」を意味します。非営利組織と聞くと、利益を得ない組織と思われがちですが、利益を得ても何ら問題はありません。ただ、それを株式会社のように株主に配当という形ではなく、次の活動や事業に投資するのです。

NPO法人水環境ネット東北では、東北地方を主なフィールドとして自然体験活動やワークショップ、意見交換会、地域交流会、河川清掃活動などさまざまな活動を行っています。「ひと」と「ひと」との交流の中から、水環境の保全及び創造を図り、持続可能な社会づくりを目指しています。

私がこの仕事をしながら感じていること、それは「誰かにやらされている仕事ではなく、自分がやっている仕事」ということです。「何をしたいのか?」「どうしたいのか?」「どうすればいいのか?」仕事をしていると、自分への問いかけがたくさんあります。そしてその度に、自分で考えたり、周囲からアドバイスをもらいながら進んでいくのです。また、私の職場では自分で仕事を見つけたり、仕事をつくることも多いのです。自ら考え、仕事をする。これはNPOで働く特徴の1つだと思います。本学で学んだことを土台として、考える工大人になっていきたいです。

それでは工大の皆様方と卒業生の皆様のご活躍を祈念して終わりと致します。



必要なやる気、 感動、協調性。 工大とも協調を。

仙建工業株式会社 (仙台市青葉区)

■ まず、会社概要と自己紹介をお願いします。

小鹿：仙建工業は昭和17年に鉄道施工会社として創設され、その後総合建設業になる。営業エリアは主に青



小鹿 信弘氏

森、岩手、宮城、福島になりました。業務は、鉄道関連工事、官公庁、民間の3ブロックですが、全体の6割以上が

JR本体とJR関連工事で、土木、建築、線路の工事比率が各3:3:4です。

現在の従業員数はJR東日本OB、出向者等約400名を含んで800名。総売上目標は300億円です。当社の場合は安全第一の特殊な線路工事ですので、保守用に配置する人数が一般の建設業より非常に多いのです。



東北新幹線試運転を控えての工事

<出席者>
 小鹿 信弘氏 / 本社営業部 次長
 1977年建築学科卒・四戸研究室
 菅原 正幸氏 / 仙台鉄道支店仙台西鉄道建築作業所 所長
 1987年建築学科卒・長谷川研究室
 伊深 佳典氏 / 本社土木部土木課 課長
 1990年土木工学科卒・阿部研究室
 鴻巣 知史氏 / 仙台鉄道支店涌谷鉄道土木作業所 所長
 1993年土木工学科卒・志田研究室
 豊田 公次氏 / 本社経営企画部システム室 主任
 1997年建築学科卒・志田研究室
 滝川 笑子氏 / 仙台鉄道支店鉄道工事部鉄道土木設計積算課
 2003年土木工学科卒・村井研究室
 <聞き手>
 榎本 幹 / 本学電子工学科教授
 1988年電子工学科卒・1回生
 菊地 良晃 / 本学デザイン工学科助教授
 1976年工業意匠工学科卒・6回生

私は昭和52年に入社しました。その頃はオイルショックで建設業が低迷していましたが、当社は新幹線工事で右肩上がりの状況でした。

菅原：私は卒業と同時に中央の企業に就職し、平成2年に帰仙して当社に再就職しました。

伊深：私の就職時はバブル期。その時代の建設業は3Kなどと言われた時代です。

鴻巣：我々の時代はバブル崩壊期で、就職は狭き門。私は試験を受けて当社に入社しました。

小鹿：昔は、大学の学科長推薦で社員を採用していましたが、平成3年からは正式に就職試験で採用するようになりました。以来、工大出身者は現在約60名にもなりました。

豊田：私は建築学科出身ですが、今は建築とは無関係の、経営企画部システム室に所属しています。

滝川：入社時には高速道路工事の現場、その後は陸橋の耐震補強工事の現場などを経験して、今は本社業務で設計積算課に異動したばかりです。

■ 仙建工業の特色は？

小鹿：JR関連の工事が多いということ。中でも災害緊急時の機動力は東北一です。また、当社には各所長たちの体験発表会がありますし、特殊な工事などは全部ビデオに撮って記録し、安全な輸送のために備えています。

鴻巣：入社2年目のとき、仙山線奥新川-山寺間のJRの線路が3万㎡の土砂で埋まる災害がありました。

山中の復旧作業は大変な工事でしたが、中でも印象的なことは線路復旧のための生コン輸送。レール上を走るJR特有のモーターカーという台車を利用しました。当時の所長の判断能力はすごかったし、チームワークも良かったですね。

伊深：当社が一番力をいれているのは、そういった現場に対応できる人材育成です。1年生から所長クラスまで教育研修を行っています。

鴻巣：責任のある立場になると、決断一つが重大事故につながるかも知れないし大成功になるかも知れないですから。

伊深：当社の社長の意向は、指示待ち人間になるな、ロボット人間になるな、正直に生きろ、全社営業マンたれ！というものです。

当社には部門を超えた繋がりがありませんし、言いたいことが言える社風があります。

それは仕事の利益にもつながることでありますが、10人、30人が同じ情報を共有する環境にあるということです。

また、当社では平成10年から業務評価制度を取り入れており、仕事以外でどれだけ頑張ったかが評価されます。それによって最近はずごく優秀な人材が増えてきました。主体性、リーダーシップを養うために仕事以外の環境づくりが大切です。やはり企業は人ですから。

伊深：私も学生時代は野球をやっていたので会社の野球部に入部し、建設業界の大会に出場しました。そういう場があったので、他の部署との交流もスムーズでした。今はフットサルをやっています(笑)。

一つの現場だと社員が数名しかいませんが、このような交流機会があると顔が広くなります。でも最近は、仕事とプライベートと割り切っている若い社員が増えてきて、自らの幅を広げるチャンスを逃しているようで残念です。

■ 社会の中で、工大の価値や存在感を感じたことはありますか？

鴻巣：入社当時、私は役所の方から「工大出身者は専門大学だからいいね」と言



菅原 正幸氏



伊深 佳典氏

分を高める気持ちがないと、どこに就職してもやっていけません。

■最後に、大学への要望を。

小鹿：6、7年前までは工大の先生方と交流がありましたが、正直言って最近の対応は事務的。学生自体も、年々目標や目的がはっきりせず、モチベーションが低くなってきています。

伊深：工大にはコンクリート界の大御所の先生もいらっしゃいますが、当社とのつながりはありません。当社は技術向上のために、工大は実践経験の提供など、工大との密接な関係が築けると思います。

大学も、今後は一般企業同様に他との競争になります。つまり、生き延びるために今のうちにどれだけ担保できるか、今、継続してやっていかなければならないことがあると思うのです。私たち工大人としては、工大が離れていくようで寂しいです。

小鹿：当社がオーナー工事したスポパーク松森（仙台市泉区松森）が地震で被害に遭いましたが、その時には工大の先生方に非常にお世話になっています。

当社は地場の企業として、やはり地場の工大ともっと協調したいですね。我々も企業ですから、仕事の受注も含めて。当社は工大から多くの卒業生を採用している実績もありますので、ぜひ考慮して欲しいですね。

当社内に工大同窓会職域支部をつくってはどうか、という話は2年程前からあります。実際、当社には工大会という同窓組織があって、この6月30日に工大会総会を行います。各幹事と相談協議し、工大と企業、先生方と卒業生とがよい関係を持ち続け、共に成長していきたいですね。我々が大学をサポートするだけではなく、将来工大の後輩たちが入社して当社を支えていくことになるのですから。

■ありがとうございました。

取材日：2006年6月12日



後列左から、榎本（本学電子工学科長）、鴻巣、豊田、菅原、菊地（本学同窓会運営委員長）高橋（本学同窓会事務局）
前列左から、蒲川、井深、小鹿の各氏



通信工学科
海野 浩司さん
(株) エフ・ディー・シー

ひと夏の思い出…

3年の夏、ちょうど夏ももう直ぐ終わりを告げる頃…私は(株)エフ・ディー・シーに2週間のインターンシップを体験してきました。私はインターンシップを通して実際に企業の活動内容を理解するとともに実社会での適応力を養おうと考えました。

実習初日、社会人としての心得やマナーについて学び、少しずつ会社の雰囲気にも慣れてきた頃、企業の会議を体験しました。初めての会議は緊張感のある雰囲気の中、エンジニア一人ひとりの意見が飛び交いとても活気があり新鮮だったのを今でも覚えています。そして次の日から今回の実習の本題でもあるホームページの作成を行いました。私は事前にHP作成を予習しておいたため、製作にはスムーズに取り組むことがで

きました。さらにデータベースを取り入れるなど様々な技術を吸収することができました。

この他にもとても貴重な体験をすることができました。今回のインターンシップで企業の活動内容だけでなく社会人としてどのような能力が求められているかを学ぶことができたと感じています。そして、一番の収穫は将来に向けての明確な目標を見出すことができたことです。この経験は現在の就職活動をする上でも、とても役立つことばかりでした。このような企業の雰囲気や技術を実際に肌で感じることでできるインターンシップを後輩たちにももっと活用して、自分の将来に向けての明確な目標を見つけて欲しいと思います。

自分の夢を見つめ直したい

これが、インターンシップに参加した理由でした。3年後期から配属される研究室に入ることや就職の決定に向け、興味があった設計事務所での実習を希望しました。

実習先は(株)佐藤総合計画東北事務所で、2週間設計業務全般を体験するという機会に恵まれました。

実習初日から実際にクライアントに見せる模型づくりを行いました。模型以外にも資料収集・CADを用いたの図面作成等を行い、設計事務所の業務が設計以外にも数多く存在することや、クライアントから頂いた仕事を完璧にこなす為情報収集を行っている事を実際に体験することが出来ました。

事務所内での作業の他に、実際の施工現場にも同行させてもらいました。施工が円滑に進むようにと社員の方々が監理を行っており、事務所での計画のあと現場で会議を重ねており、何時間にも及ぶ会議はモノ作りに妥協を許さない建築家としての姿勢を垣間見た時でもありました。

学内では設計をするだけで終わってしまいますが、建築とは設計から施工までトータルに考えて計画を行う事が必要なることを現場で学べた事は大変良い機会でした。



建築学科
高橋 愛さん
(株)佐藤総合計画東北事務所

実際にインターンシップに参加した事で、社会にでて働くことの厳しさや人々の温かさを改めて実感することが出来ました。私は設計業務の一連の作業を経験することによって、自分が何を目標に今後進んでいけばいいのか、わずかながら自分と向き合えました。

現在に至り、私を感じ得た物は少しずつではありますが形となっているような気がします。まだ学生なので、その形は甘ちゃんではないのかもしれませんが、私にとって東北工業大学3年生の夏は大変重要で、貴重な経験をした2週間でした。



(株)佐藤総合計画東北事務所にて作成した、特別養護老人ホームの縮尺1/200の模型。

インターンシップを通じて

私はインターンシップで「デザインアートセンター」という主に商業施設施工を手がけている会社へ行ってきました。場所は東京、期間は夏休み中の約2週間。主に現場での作業に参加させていただきました。

現場は池袋の東部百貨店、そのワンフロアにわたり店舗改装しているところで、養生作業や仕器の搬入などを手伝いつつ図面から実際にできる様子を生で見ることができました。その現場には完成するまで参加させてもらったのでクライアントとのやりとりなども垣間見ることができました。

現場にはクライアントのショップのオーナーもたまに来ており指示を出したりしていました。例えばレンガ調のタイルを貼り付けている壁があったのですが、それに対する指摘があって「目地が太すぎてレンガが積んであるように見えない」「壁にくっつけているようにしか見えない」といった指摘で、これにはすぐ共感しました。確かに実際貼っているだけなのですがそれを積んでいるように見えるか貼っているだけに見えるかの違いが、目地の数ミリの差によって変わってきます。おそらく一般の人にはわからない違いなのですがそういった細部もこだわることがデザ



デザイン工学科
石橋康永さん
デザインアートセンター

インの質を高めることにつながるのだと知らされました。

そして何より現場の人の話を聞いたことが勉強になりました。そこで働いている工大の先輩をはじめ現場監督や大工の方々、一緒にインターンシップに参加していた東京の学生など、休憩中に雑談した話が一番深い内容だった気がします。

夏の暑い時期で大変な面も多々ありましたが、学生は基本的に実社会とのつながりがあまりないためこういった経験は大変貴重だと思いました。

今回インターンシップを受け入れて頂いたデザインアートセンターの方々には、お忙しい中、私たち学生の面倒を見ていただきまして本当にありがとうございました。



インターンシップを通じて



建設システム工学科
平野 匡美さん
緑設計 (株)

私は3年生の夏、緑設計(株)でのインターンシップに参加しました。

緑設計(株)は主に公園設計を多く手がけ、生態系保全モニタリング調査をするなど環境にも深く関わっている会社です。

活動の動機は、将来設計関係の仕事に就きたいことと環境に興味があったことから志願しました。

5日間という短い期間でしたが、学校生活では経験することのできない現場での仕事は新鮮なものがあり、社会の雰囲気を肌で感じることができました。仕事に対する正確さと真剣さは、のんびりとし

た学生の私にとっては自分の甘さに気づかされるものでした。しかし、だからこそ自分自身このままではいけないという意識が持てたのだと思います。

また、社員の方々と話をして仲良くなり、仕事を教わっていくうちに自分自身の視野が広がり成長する良い機会になったと思います。

自分を高めることができ、実際の社会の雰囲気を肌で感じる事ができるこのインターンシップの機会を、今後多くの学生が活用し、貴重な体験をしてほしいと思います。

大きな財産を手に入れた



環境情報工学科
村上 拓馬さん
国土交通省東北地方整備局

昨年の夏、インターンシップで仙台河川国道事務所に行ってまいりました。2週間という短い期間ではありましたが、とても刺激的な時間を過ごすことができました。

研修期間中は一般国道4号蔵王拡幅事業について調べたり、現場研修を体験しました。蔵王拡幅によって以前より渋滞が減少した箇所と、逆に増加した箇所がありました。その原因を調べてみると拡幅された所はスムーズになっているが、出入口付近で渋滞が起こっているのです。このように改善されたものもあれば、新たな課題も出てくるのです。道路行政にはマネジメントサイクルというものがあり、一度行った事業を再度見直し、残された課題を改善していく仕事があるというのをインターンシップを通して知りました。

また、現場研修では工事中の高速道路や橋を見学しました。中でも一番感動した勾当台公園付近に埋められている

共同溝見学でした。災害時でも被害を最小限にするため、水道・電話線・ガス管を地中に埋めて守っているのです。偶然にもインターンシップ中に地震と台風という2つの災害に遭い災害対策本部を見学することができました。

このインターンシップを通じてたくさんのことを経験し、実際に社会に出てヒトとして大きな財産を手に入れることができました。キャンパスで勉強することは勿論大切なことです。しかし身の回りばかりを見るのではなく、少し視野を広げて色々なことにチャレンジする精神が大切なのだと学びました。



北海道支部

北海道支部 2005

2005年8月31日(水)の夕刻、幹事役である札幌市役所勤務、山口龍彦氏のお世話でサッポロビール園を会場に北海道支部会が開催されました。山口氏はアスベスト問題処理に追われ、多忙を極める中でのセッティングを余儀なくされたため、多くの方に声がかけてできなかったとのことでありました。それにもかかわらず、菅野堅介支部長をはじめ、15名のOB諸氏が万障を繰り合わせて集まってくれました。

今回の支部総会は北海道工業大学との総合定期戦第20回記念大会を機会に開催されたので、大学から建設システム工学科の外門教授、栗原技師、建築学科の船木

講師、情報通信工学科の高野教授、電子工学科の庄司教授そして榎本、広報室の赤間助手が参加しました。

北海道から本学に学ぶ学生はめっきり減少し、さびしい限りですが、北海道に在住する多くのOB諸氏の活躍ぶりを見聞きするにつけ大変頼もしく思えた次第であります。私は支部総会に毎回参加しているの、顔馴染みになった工業意匠学科卒で自治タイムス社の千葉敏一氏、エスケー石材企画の中股敬氏と話が弾みました。そして、会報が届かないとのこと小言も頂戴しました。

楽しい時間が持てたことは感謝。

運営委員 榎本 幹
(電子工学科 1 回生)



青森支部

青森県支部同窓会開催

平成18年6月3日(土)青森市内のホテルにて、青森県支部同窓会が開催されました。支部結成に至るまで前史は長く、単学科ごとの会合は、以前から実施されていたものの、今回、新会長に倉橋純造氏を推薦し、東北工業大学の藤井事務局長はじめ、各学科教授、同窓会本部、後援会の多くの方々のご協力をいただき、やっとのおもいで開催の運びとなりました。

7名で組織した準備会も3月に入り具体的な行動にうつり、まずは身近な声かけからと・・・

苦勞の甲斐が実り、開催当日は、18名の来賓の皆様の参加もいただき総勢70余名にて、盛大に開催されました。書面ではありますが心から感謝申し上げます。

久々の友人、先生との再会。初対面の名刺交換。当時を想いだしての会話も時間を忘れ

させていたようです。『よさこいソーラン&ねぶた囃子』の余興も会場をさらに盛り上げ一足早い夏祭りの雰囲気を感じさせました。2次会への参加者も予想をはるかに超え、同窓の絆が、なおいっそう深まったようです。その後も、翌日の父母懇談会を気にしながらめいめい夜の繁華街へと更なる親睦を求めて、流れていったはずです。

今後の同窓会の動きとして、きちんとした組織を確立し、県内各地区ごとの活動を活発化していただき、交流を図っていくつもりです。

何かのきっかけがなければ本気になれない。何かのきっかけがなければ、出会いが生まれません。何かのきっかけで工大で学び、何かのきっかけで同窓会に参加する。今回の出会いに感謝するとともに、まだまだ身近に居られる同窓の方々を誘い輪を広げてゆきたい。

ご尽力くださった工大の役員、教授、本部同窓会、後援会の皆様に深く感謝し、来年の更なる拡大に向けてNEXT TRY!

青森支部監事 黄金崎 勉
(建築学科 11 回生)



新潟支部

東北工業大学後援会主催の父母懇談会が6月3日(土)に開催された折、同窓会新潟支部会も第10回目の支部総会を開催いたしました。

今回の総会から日程を、例年の11月から後援会父母懇談会と同じ開催とし、同窓会会員だけでなく在学生の父母の皆さん、そして先生方との意見交換が出来、大変有意義な会となりました。また、父母懇談会には各学科の先生がお見えになられることから、今まで参加さ

れていなかった方の出席が目につきました。今年度は学校見学会、卒業予定者との懇談会等、後援会新潟県支部とも密接な連絡を保ち、より一層新潟県内の東北工大のネットワークを確立し、同窓生だけでなく、在校生の活動も支援できる様、活動を行っていきたいと考えています。

新潟支部 会長 篠川 恒
(土木工学科 3回生)



新潟支部講演会

本学後援会との連携強化



東北工業大学後援会副会長

長島 久雄 (ながしま ひさお) 氏

1941年 仙台市生まれ
1964年 東京写真専門学校卒
同年 東北放送(株)入社・報道カメラマン
1972年 記録映画・コマーシャル制作
2001年 東北放送定年退社
同年 東北映画制作入社
2005年 同 退社
現在 趣味の残したい風景などを写真に収めて全国を旅

昨年の東北工業大学同窓会設立20周年記念事業の一つ、技術革新と社会制度の進展を中心に、それぞれの立場から樋口陽一先生と岩崎俊一先生の意見交換の対談に興味を持ち聞かせていただきました。

理科系・文科系のミスマッチかと思いつつ見事。会長さんはじめ役員の皆様には大変な苦労だったと思いますが、大盛況のうちに終わりをめでとうございました。

私達、後援会も昭和60年4月発足、今年で21年目を迎えることが出来ました。これも同窓会の皆様には格別のご理解とご支援を賜り、厚くお礼申し上げます。特に後援会の年間重要施策で

あります父母懇談会の開催に際しましては、関連して実施されます講演会の講師として同窓会からの皆様のご参加、ご協力をいただいております。聴講された学生のご父母の皆さんからも、大学の先輩としての実践を踏まえた具体性のある講演に大きな讃辞が寄せられているところであります。今後もよろしく願いいたします。

今年も6学科754名の学生が、新たに巣立っていきました。博士も28名が誕生、東北工業大学卒業生も27,334名が、全国各地で産業界、教育界、公共機関などの広い分野において活躍し、社会から信頼と高い評価を



後援会総会での齋 精一後援会会長

後援会総会での秋元俊通同窓会会長の挨拶



得られております。

学長からの提案創造研究とそれを展開する研究に加えて、実社会との融合を図る統合研究「創造から統合へ・仙台からの発信」をスローガンから始まり、学生にわかりやすく社会に出て、すぐに実践力のある学生を送り出そうと平成15年10月に仙台市の中心部に「東北工業大学一番町ロビー」をオープンさせ一階にはギャラリーを、学生と地域住民との交流、そして4階ホールでは学内外講師による学術講演会・シンポジウムなど教職員によるひとつの社会貢献として各会多くの参加がありたびたびマスコミにも取り上げられ東北工業大学の名前を紹介されるまでになりました。

学内に目を向ければ同窓生には懐かしい1号館（大学創立当初の建物）に変わって新1号館が今年7月末に

完成します。学生との関わりを第一義に、学生サービス・執務スペースの一元化を実現。正門も変わり新キャンパスとなります。ぜひ一度母校に足を運んでください。

後援会の事業でも同窓会との連携強化を掲げており、岩手、秋田、山形、福島同窓生による支部の立ち上げに力を入れてほしいところがあります。父母の立場から地域の方々との意見交換を望んでいるところです。

これから学生の少子化問題で一人でも多くの入学生確保に大変な時代にはいつております。今後大学ご当局・同窓会・後援会が三位一体になり大学発展のためこれまで以上に連携を密に努めましょう。この場をお借りして同窓会の皆様のみますますのご活躍を祈念するところです。

大学からのお知らせ

教育振興資金事業計画の 寄付募集について

財務課長
古山 芳雄

同窓会会員の皆様におかれましてはお元氣にご活躍のこととお慶び申し上げます。日頃より東北工業大学に対しまして、多面にわたりご支援ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、同窓生の皆様が生徒生活を過ごした思い出深い香澄町キャンパスの現1号館（通称：蜂の巣校舎）は、築後40数年を経て老朽化とともに耐震性能が著しく劣化したことで建て替えることとなったことは、ご承知のとおりです。新校舎は正門から動物公園に向かうバス通り沿いに、学生サービスの向上及び執務機能の向上を強く意識した設計のもと、昨年6月に着工し、いよいよ今年7月末に完成の運びとなりました。学生のさまざまな要件を同じ場所に対応できるよう窓口を統合するなど、学生の視点に立った利用しやすい機能と空間を備えた明るい校舎イメージで、大いなる期待が寄せられるところでもあります。

また、学生・生徒の勉学の機会を側面から援助することを目的とし、在学中における修学上の経済的負担の軽減を図るため、奨学金制度を充実させる新たな助成基金を設けました。しかしながら、現在の金利状況を鑑みますと、奨学金としての果実（受取利息収入）を生み出すためには相応の基金（元金）が必要となります。これらの事業目的を達成する為の資金確保には大学自らが努力するものと承知し

ておりますが、同窓生の皆様のお力添えも欠かせないものであることもご理解いただければ幸いです。

本学では、昨年度より5年計画で学校法人東北工業大学「教育振興資金募集事業」を計画し、同窓会・後援会等の関係団体、一般企業及び本学役員・教職員に向けて寄付金の募集を実施しているところであり、同窓生の皆様には昨年7月、同窓会設立20周年記念号「工大入」に寄付金募集の趣意書を同封させていただき、ご協力をお願いしたところでした。現在、同窓生個人として120余名の方々からご寄付をいただいております。

今日、大学を取り巻く環境は、少子化の進行とともに一段と厳しい時代を迎えておりますが、同窓生一人一人が築き上げた大学を永続的に発展させるため、全学挙げて諸施策に取り組んでいるところです。

つきましては、大変恐縮に存じますが、教育振興資金募集事業の趣旨をご理解いただき、格別のご支援ご協力をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

末筆ではございますが、お近くにお越しの際は、ぜひ母校までお立ち寄りいただき、変貌し発展しつづける工大の姿をご覧ください激励いただければ幸いです。皆様のさらなるご活躍とご健勝を祈念申し上げご挨拶いたします。

東北工業大学同窓会 第22回定時総会のご案内

開催日時：平成18年8月26日(土)

定時総会／16：00～17：00 懇親会／17：00～19：00

会場：ホテル仙台プラザ

(仙台市青葉区本町2丁目20-1 TEL022-262-7111)

議題：①平成17年度事業報告 ②平成17年度決算報告 ③平成17年度監査報告
④平成18年度事業計画 ⑤平成18年度予算案 ⑥役員改選・その他

【懇親会】

●卒業生会員参加費／3,000円 ●参加申込み締切り／8月15日(火)
(郵便局にて、同封の郵便振替通知書でお申し込みください)

郵便振替口座 02250-6-42460 東北工業大学同窓会総会実行委員会

※当日は参加者名簿を配付いたします。

なお、名簿への記載は、締切日までに申込まれた方のみとなります。ご了承ください。

卒業された皆様へ

東北工業大学同窓会 会費未納の方へ

同窓会会費は会員間のネットワーク化事業、在学生への支援、支部活動の推進、
本学および本学後援会との共同事業等を進めるために有効に活用しております。
つきましては、同窓会会費未納の方は、別紙郵便振替通知書で、早急に納入いた
だきますようお願い申し上げます。

●終身会費 20,000円

(5,000円×4回・10,000円×2回の分割納入方法もございます)

●郵便振替口座

02280-5-22263 東北工業大学同窓会

※すでに納入済の会員には、郵便振替通知書は同封してありません。

本会運営の趣旨をご理解の上、この通知をご容赦ください。

同窓会・後援会事務局スタッフ 高橋優子さんのご紹介

今年4月から同窓会と後援会の事務局
担当になりました。大学と同窓会と後援
会の連携がさらに強化されるよう努めて
参りたいと思います。

最近、OB・OGの方々との交流の場
に出席する機会も増え、改めて人と人との繋
がりの大切さを実感しています。これから
は工大同窓会が情報交換の場としてもっと利用され、会員
間のネットワークづくりが円滑になるよう頑張っていきたい
と思います。



高橋優子

発行：東北工業大学同窓会

事務局：東北工業大学就職課内 〒982-8577 仙台市太白区八木山香澄町35-1

TEL.022-229-1151(内線315) FAX.022-229-8002

URL.http://http://www2.odn.ne.jp/~aan98460/